

雪女と散歩



- 1 ^{きのう} ^{よる} ^{ぼく} ^{まち} ^{ゆき} ^ふ
昨日の夜、僕の街で雪が降りました。
- 2 ^{さむ} ^す ^{ひと} ^{とくべつ} ^{ぼく}
寒いドイツに住む人にとっては、特別なことではないかもしれませんが、僕は
- 3 ^{あなた} ^{にほん} ^{みなみ} ^す
暖かい日本の南に住んでいます。
- 4 ^{ゆき} ^ふ ^{しる} ^{はな} ^{こううん} ^み
ここでは雪はほとんど降りません。なので、その白い花びらを幸運にも見るこ
- 5 ^{でき} ^{きのう} ^{はじ}
とが出来たのは、昨日が初めてでした。
- 6 ^た ^{あさ} ^{かあ} ^{ぼく} ^お ^よ
「のび太くん！」朝、お母さんが僕を起こそうと呼びました。
- 7 ^た ^{ゆき} ^ふ ^お ^き ^が ^{はや}
「のび太くん、雪が降っているわよ！起きて着替えて、早くおばちゃんのとこ
- 8 ^い ^{さむ} ^{なに} ^{ようい} ^{ぶあつ}
ろへ行ってあげて。おばちゃん、寒くなるのに何も用意してなかったから、分厚
- 9 ^{ようふく} ^{ぼうし} ^{てぶくろ} ^も ^い
い洋服がいの。このコートと、帽子と、それから手袋も持って行ってあげて。」
- 10 ^{ぼく} ^ね ^{まなこ} ^{こた}
「えっ？」僕は寝ぼけ眼で答えました。
- 11 ^い ^{とお}
「わざわざおばちゃんのところまで行かなきゃいけないの？でもすごく遠いし、
- 12 ^{そと} ^{さむ}
外はとっても寒いよ...」
- 13 ^た ^{おとこ} ^こ ^{そと} ^ま ^{しろ} ^{きれい}
「のび太くん、あなた男の子でしょ！それに外は真っ白でとても綺麗よ！きっ
- 14 ^{たの}
と楽しいわ！」
- 15 ^{ことば} ^{すべ} ^き
その言葉で全てが決まりました。
- 16 ^{ぼく} ^{あつで} ^き ^{おも} ^{ふゆよう} ^{くつ} ^は ^{しゅつぱつ}
僕は厚手のコートを着て、重い冬用の靴を履いて出発しました。

- 17 まだまだ空^{そら}から雪^{ゆき}が落ち^おてきていて、目の前^{め まえ}の道^{みち}も普段^{ふだん}と違^{ちが}っていて、見^み分け
- 18 がつきませんでした。小^{ちい}さい丘^{おか}を歩^{ある}いて、滑^{すべ}って転^{ころ}ばないよう注^{ちゅうい}意^いしなければ
- 19 なりませんでした。
- 20 なんて綺^{きれい}麗^{れい}なんだろう！
- 21 そして街^{まち}はとて静^{しず}かで、まるで人^{ひと}々^{びと}は皆^{みな}眠^{ねむ}っているかのようでした。
- 22 まった全^まくどこに^こにいるか^わかんないや。ど^むっちを^む向^むいても、白^{しろ}、白^{しろ}、白^{しろ}！
- 23 もう道^{みち}に迷^{まよ}っちゃったのかな？この家^{いえ}も知^しらないし、あ^{いえ}っちの家^みも見^{こと}た事^{こと}ない
- 24 ...。こ^{ゆき}うや^{かこ}って雪^{ゆき}にす^かっかり^{かこ}囲^{かこ}まれ^{かこ}ちゃ^{かこ}うと、な^きんだか^みち^わょつと^わ気^き味^みが^わ悪^{わる}いや。
- 25 ひ^ことり^こぼ^こち^こで^こ怖^こくな^こって、道^{みち}に迷^{まよ}った^{まよ}よ^{まよ}う^{まよ}な^{まよ}気^きも^{まよ}す^{まよ}る^{まよ}し...。そ^{とき}んな^ま時^ま、前^まに
- 26 い^{いち}ど^どき^き一^{いち}度^ど聞^きいた^き怖^こい^こ話^わを^わ思^{おも}い^{おも}出^だしま^だした^だ。
- 27 激^げしい^げ吹^ふ雪^ぶの中^{なか}で^{なか}人^{ひと}々^{びと}を^{びと}驚^{おど}かせ^{おど}、道^{みち}に迷^{まよ}わ^{まよ}せる^{まよ}お^{まよ}化^ばけ^{まよ}、雪^{ゆき}女^{おんな}の^{おんな}話^わを^わ...。あ^{はなし}ん
- 28 な^この^こ、子^こ供^{ども}だ^{ども}ま^まし^まの^ま話^わだ^わけ^わど^ど、で^{はなし}も^{はなし}...
- 29 か^かぜ^かは^か絶^たえ^た間^まな^まく^ま吹^ふいて^ふいて^ふ、ま^{つめ}る^{つめ}で^{つめ}冷^てたい^て手^のが^の喉^{のど}に^{のど}触^ふれる^ふか^ふの^ふよう^ふ。
- 30 あ^{とお}の^み遠^とく^みに^み見^きえる^み、気^き味^みの^き悪^{わる}い^{わる}シ^{なに}ル^{なが}エ^{おお}ット^{おお}は^{おお}何^き？^き長^きく^きて^き大^きき^きい^き！^きた^きだ^きの^き木^きに^き決^き
- 31 ま^きつ^きて^きる^き！
- 32 も^きち^きろ^きん^きそ^きれ^きは^きた^きだ^きの^き木^きで^きし^きた^きが^き、そ^{ぼく}れ^おで^おも^お僕^{ぼく}は^お恐^おろ^おし^おく^おな^おって^お、わ^かつ^だと^だ駆^かけ^だ出^だ
- 33 し^きま^きし^きた^き。
- 34 し^{しんぞう}ん^{ぞう}ぞ^{ぞう}う^{ぞう}心^{しん}臓^{ぞう}が^{ぞう}ド^{ぞう}キ^{ぞう}ド^{ぞう}キ^{ぞう}し^{ぞう}な^{ぞう}が^{ぞう}ら^{ぞう}、僕^{ぼく}は^{ぼく}お^{ぼく}ば^{ぼく}ち^{ぼく}ゃ^{ぼく}ん^{ぼく}の^{ぼく}家^{いえ}を^{いえ}探^{さが}し^{さが}ま^{さが}した^{さが}。

- 35 あっ！ やっと！ あのとんがり^{やね}屋根の、お庭^{にわ}に桜^{さくら}の木^きがあるお家^{いえ}！ 見^みつけた！ 良^よ
- 36 かった、 やっ^みと見^みつけたよ！
- 37 おばちゃん^{げんかん}が玄関^あのドアを開^いけてくれるや否^{いな}や、僕^{ぼく}はおばちゃん^とに飛^とびついて、
- 38 腰^{こし}に顔^{かお}を埋^{うず}めました。
- 39 「麻美子^{まみこ}おばちゃん！ 怖^{こわ}いよう！ 雪女^{ゆきおんな}が！」
- 40 「あらあら」おばちゃん^おは落^つち着^{こえ}いた声^{こえ}でなだめると、僕^{ぼく}をリビングへ^つと連^つれ
- 41 て行^いきました。
- 42 「雪女^{ゆきおんな}を怖^{こわ}がる必要^{ひつよう}なんてないのよ。」
- 43 僕^{ぼく}はおばちゃん^もに持^もって来^きた服^{ふく}を渡^{わた}し、一^{いっしょ}緒^{しょ}にリビングで温^{あたた}かいお茶^{ちや}を飲^のみま
- 44 した。
- 45 「でも知^しってる？」おばちゃん^きは聞^ききました。
- 46 「どうして雪女^{ゆきおんな}がお化^ばけにな^なってしまったか。」
- 47 僕^{ぼく}は頭^{あたま}を横^{よこ}に振^ふりました。
- 48 「彼女^{かのじょ}は若^{わか}い女^{おんな}の人^{ひと}だったの。吹雪^{ふぶき}で道^{みち}に迷^{まよ}ってしま^{まよ}ってね、一^{ひとり}人^{さび}寂^{さび}しく亡^なく
- 49 なったのよ。今^{いま}はお化^ばけにな^なってしまったけどね、小^{ちい}さな子^こ供^{ども}を傷^{きず}つけるよう
- 50 なこと^{ぜったい}は絶^た対^たにしな^ないわ、のび太^た。」
- 51 興^{きょう}味^み深^{ふか}くおばちゃん^{はなし}の^き話^わを聞^きいていた僕^{ぼく}は、そのこと^{こと}につい^つてよく考^{かんが}えてみ

- 52 ました。
- 53 ^{ほんとう} ^{こわ} ^{ひつよう}
本当に怖がる必要はなかったのかな？
- 54 ^{たし} ^{はなし} ^{すじ} ^{とお} ^{ゆきおんな} ^{わか} ^{おんな} ^{ひと}
確かにおばちゃんの話は筋が通っている。雪女は若い女の人だったんだ。僕
- 55 とそんなに年としもか変わからなかったかもしれない。
- 56 ^{うんめい} ^{いま} ^ぼ ^ふ ^し ^ぎ
なんてひどい運命なんだろう。今もお化けとしてさまよっているのも不思議じ
- 57 やない。
- 58 ^{ちゃ} ^{ぼく} ^い ^{くつ} ^{あし} ^{すべ} ^こ
「お茶、ありがとう！」僕はそう言うと、靴に足を滑り込ませました。
- 59 ^{かえ} ^{みち} ^{こわ}
「帰り道はもう怖くないさ！」
- 60 ^{おもて} ^で ^{ゆき} ^ふ ^{まほう} ^{ひか}
表へ出ると、まだまだ雪は降ふっていて、まるで魔法のように光ひかっていました。
- 61 ^{ゆきおんな} ^{かみ} ^{おな} ^{しろ}
雪女の髪も、同じくらい白しろいのかな？
- 62 ^{ゆきおんな} ^{こえ} ^{きぎ} ^{あいだ} ^{はし} ^{かぜ} ^{こえ}
雪女の声も、木々の間あいだを走はしりぬける風かぜのような声こえなのかな？
- 63 ^{ゆきおんな} ^{いけ} ^ふ ^つ ^{ゆき} ^{つめ}
雪女のほっぺたも、池いけに降ふり積つもった雪ゆきのように冷つめたいのかな？
- 64 ^{かえ} ^{みち} ^{ゆきおんな} ^あ ^{まった} ^{しんぱい}
帰り道は、雪女ゆきおんなにばったり会あうかもしれないということは全まったく心配しんぱいしません
- 65 ^{みち} ^{まよ} ^{いえ} ^{わか} ^{しんぱい}
でした。道みちに迷まよって、家いえが分わかからなくなる心配しんぱいも、もうありませんでした。
- 66 ^は ^ば ^{きも} ^{かど} ^ま ^{ひそ} ^き ^{すがた} ^み
晴はれ晴ばれとした気持きもちで、角かどを曲まがるたびに、密ひそかに消きえかかりそうすがたな姿みを見
- 67 ^{おんな} ^{ひと} ^{いっしょ} ^{いえ} ^{かえ} ^{おも}
つけ、かわいおんなそうな女ひとの人いっしょと一緒に家いえまで帰かえれないかな、なんて思おもっていました
- 68 た。